万葉時代のグリーンケミストリー　1

―　古代の酒造法と万葉時代の酒の文化について　―

杉山一男[†1]

Green Chemistry in the Manyo Era 1: Ancient Sake Brewing Methods and Sake Culture in the Manyo Era

Kazuo Sugiyama

Kuchikamizake brewing in ancient times involved the conversion of starch into glucose by the amylase enzyme contained in human saliva, followed by fermentation with wild yeast. Originating from the Asian mainland, another brewing method relied on yeast and amylase secreted by *Aspergillus* fungi. This paper elaborates on these ancient sake brewing techniques and narrates several anecdotes revolving around sake. Further, through a selection of sake-related poems from the *Manyoshu* anthology, it provides a glimpse of the role of sake in people's lives during the Manyo Era, a facet of ancient Japanese culture that remains familiar to this day.

1.　はじめに

酒はエチルアルコールを含む飲料の総称であり、抑制作用があるため飲むと酩酊を起こす。すなわち、酒は、脳の様々な領域で覚醒や刺激を減少させるかあるいは抑制し、神経伝達の水準を低下させる向精神薬でもある。運動失調、抗不安作用、鎮痛、鎮静、眠気、認知障害、健忘、陶酔、筋弛緩、一時的な血圧や心拍数の低下などを起こすのである。酒はストレス発散の手段でもあるが酩酊が引き起こすアコールハラスメントは古代から社会問題となっていた。紀元前 1700 年頃の最古の成文法であるハンムラビ法典にはワイ

[†1] 近畿大学名誉教授
Professor Emeritus at Kindai University

ンを酔っ払いに売ってはならないと記されている。

この酒という液体はヒトが誕生する前から存在していたといわれる。ブドウ・柿・バナナ・マンゴーなどの果物にはブドウ糖（グルコース）や果糖（フルクトース）が豊富に存在するので十分熟した頃、発酵[1]をつかさどる微生物、即ち、野生の酵母(菌)（イースト)[2]が付着してエチルアルコールを含む物質が自然に産生していたのである。我々の祖先はエチルアルコー

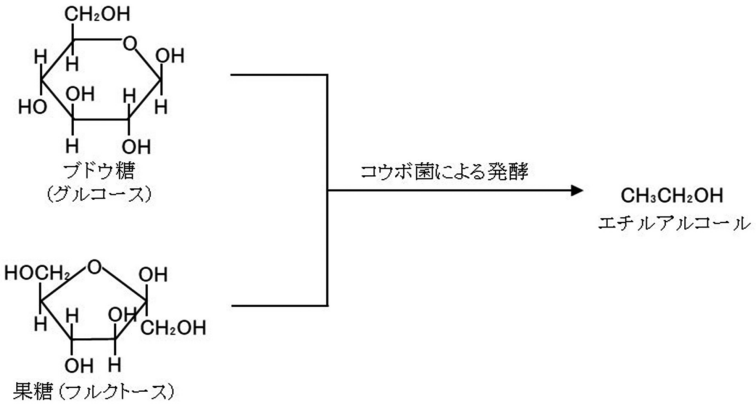

図１　単糖からエチルアルコールへの変換

ルが含まれているとは意識せずに発酵した果物を口にして酩酊したヒトもいたことは十分想像できるが、これを酒と呼んでよいかについては議論もあろう。やがて、ヒトはアルコール発酵[3]という現象を覚えてブドウを容器に蓄え、意識的に酒を造ることになった。ワインの誕生である。ワインなどの果実酒は、図１に示したグルコースやフルクトースを多く含む果実の酵母によるアルコール発酵の１段プロセスで造られる。

一方、麦や米などの穀物を原料とするビール・ウイスキー・日本酒・焼酎などの穀物酒は、先ず、穀物に含まれる分子量の大きいデンプンを分解（糖化）して分子量の小さいグルコースにして、次いで酵母によるアルコール発酵させる 2 段プロセスで造られる（図 2)。穀物酒の醸造における糖化の手段が夏季乾燥した気候の中近東やヨーロッパと高温多湿な気候の日本を含む東アジアや東南アジアでは異なる。前者の地域ではデンプンの分解に麦芽（モルト）[4]を使ってビールやウイスキーなどのアルコール飲料をつくるのに対して、後者の地域では穀物酒の醸造にはデンプンの分解にコウジカビ[5]を使うことに特徴がある。すなわち、ヨーロッパなどでは夏季、乾燥してい

るのでカビが生えにくいためモルトを利用したがアジア各地ではコウジカビを使った醸造法が発達したのである。

中国では紀元前 2200 年頃、夏の始祖禹王の時代に酒が造られていたことが二里頭遺跡から酒器である銅爵が発掘されていることからわかる。この夏の最後の王桀は酒の池に船を浮かべ、肉を山のように盛る肉山脯輪の豪勢な宴会を催したために国は衰えたという[6]。その後、紀元前 1100 年頃、殷（商）の紂王が妲己とともに、**以酒為池　懸肉為林**　すなわち、酒池肉林に溺れたこともまたあまりにも有名である。論語には、**郷人で酒を飲む**（村の人たちで酒を飲む）の記述があり、紀元前 5 世紀頃には庶民の飲み物になっていたようだ。古代中国の酒の原料は主として米であり、穀類から造られる酒の醸造は中国の長江流域では夏王朝が誕生するはるか以前に稲作が始まった時代に遡るのではなかろうか。

日本列島に住む人々は何時頃からどのように酒に対していたかに興味がもたれる。列島に住む人々は、卑弥呼の時代（3 世紀前後の弥生時代後期後半）から酒好きだったことが「魏志倭人伝」（魏書　第 30 巻烏丸鮮卑東夷伝倭人条）からわかる。**其會同坐起　父子男女無別　人性嗜酒**　（その会合での立ち居振る舞いに、父子や男女の区別はない。人は酒を好む性質がある）とある。

本研究では、グリーンケミストリーの観点[7]から日本列島における古代の酒の醸造法と万葉時代の酒の文化を述べる。ここに、万葉時代は、通常、大化の改新（645 年）の初期万葉から、大伴旅人・山上憶良・山部赤人・大伴家持が活躍した天平万葉までのほぼ 120 年とされる。しかし、万葉集[8]には 5 世紀前半に存在していたとされる仁徳天皇（第 16 代）の皇后磐媛の歌

君が行き日長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ　　(85)

があることから、本論文では前報[7]に従って、仁徳天皇の時代から万葉集の最後に収録された天平宝字 3 年（759 年）の大伴家持の歌

新しき年の初めの初春の今日降る雪のいや重け吉事　　(4516)

までの 5 世紀前半から 8 世紀末までとする。即ち、仁徳天皇が在位したとされる古墳時代後半（5 世紀前半）から推古天皇（第 33 代、在位 592～628 年）前後の飛鳥時代（6 世紀末から 7 世紀前半）を経て、天武天皇（第 40 代、在位 673～686 年）と持統天皇（第 41 代、在位 690～697 年）の白鳳期（奈良時代前期）と元明天皇（第 43 代、在位 707～715 年）が藤原京から平城京に遷都した和銅 3 年（710 年）～平安遷都（794 年）の天平期（奈良時代後期）にかけての約 350 年間と広く考えることとする。

2.　古代列島の酒

日本列島に住む人々は、いつ頃から米酒を造るようになったのかがはっきりしない。確かなことは、稲作が伝来し、定着してからのことではあろう。

列島での稲作は、紀元前 1000 年以上前から行われてきたことが、イネ花粉の出現、イネのプラントオパール [9] の検出・同定から推定されている。また、日本最古の水稲耕作（水田）遺跡は、弥生時代早期初頭（縄文時代晩期終末）とされる佐賀県唐津市の菜畠（なばたけ）遺跡で、石包丁・鋤・鎌などの農業具が出土している [10]。菜畠遺跡の重なる地層の一部の放射性炭素 14 を用いた年代測定からこの遺跡は紀元前 930 年頃とも推定されている [10]。しかし、当時は収穫量が少なく、デンプン質の不足分をアワやヒエなど他の穀物やドングリなどの堅果類で補っていたであろう。従って、コメは多様な食べ物の一つに過ぎなかったとも考えられる。その後、稲作が発達し、卑弥呼の時代には列島の人々は酒好きとの記述があることから、弥生時代後期後半の 3 世紀前後には稲作がより広まり、酒の醸造が始まっていたことが分かる。そして、万葉時代初期、5 世紀前半の仁徳天皇の頃には渡来した鉄製の農機具によって飛躍的に農業技術が向上して、イネの水田耕作が列島全体に拡大した。

3.　アルコール発酵 [3]

酒は蒸した米にコウジカビを生（は）やした「麹 [11]」と水と酵母を加えて醸造して得る。コウジカビは、α-アミラーゼ・α-グルコシダーゼ・グルコアミラーゼなどの酵素アミラーゼを菌体外に大量に分泌し、米や麦などに含まれる高分子量のデンプン中のアミロース（直鎖状の分子で分子量は比較的小さい）やアミロペクチン（分岐状の分子で分子量は比較的大きい）などのグリコシド結合 [12] を加水分解して低分子量の単糖であるグルコース、二糖類の麦芽糖（マルトース）、およびオリゴ糖 [13] など低分子の糖にする。

これらの糖類に酵母が作用すると酒ができる。すなわち、第 1 ステップで、アスペルギルス属のコウジカビが出す酵素アミラーゼが米のデンプンを分解してブドウ糖とする酵素反応（糖化）のプロセスと第 2 ステップでサッカロマイセス属の酵母（イースト）がブドウ糖をアルコールとするアルコール発酵の 2 段プロセスで造られる。アルコール発酵の段階では図 2 に示すように複数の酵素が作用する。図中の[グルコース]n は繰り返し単位といい、グルコース基が n 個連なっていることを示す。アミロースの場合、n = 300～600 である。

第 1 ステップ　糖化：アスペルギルス属のコウジカビ

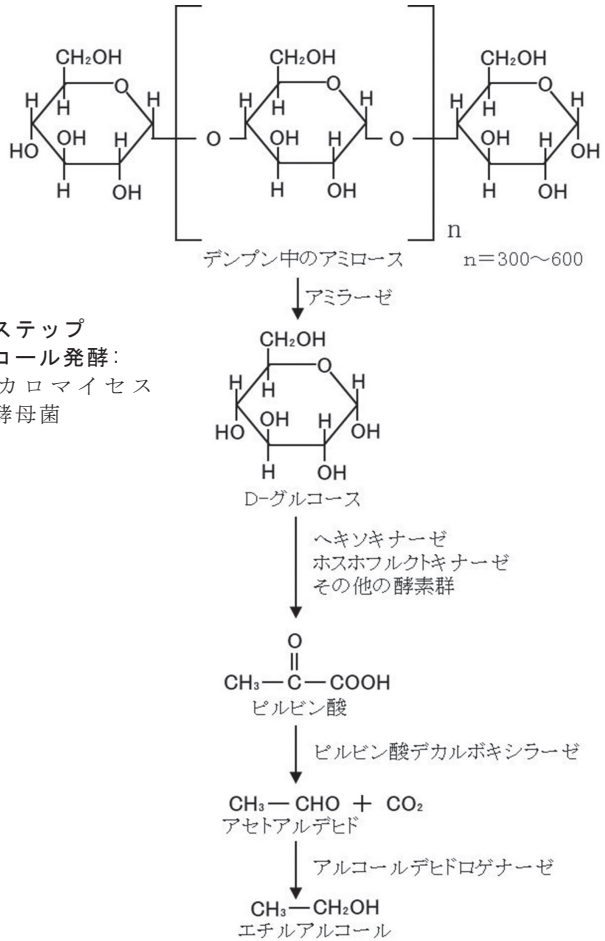

図 2　穀物酒の醸造過程：アミロースの糖化とグルコースのアルコール発酵

4.　万葉時代の酒の造り方

4.1　口噛み酒

4.1.1　口噛み酒の造り方

アミラーゼはヒトの耳下腺（唾液腺）や膵臓からも分泌される消化酵素であり、アミラーゼが唾液中に含まれることが以下に述べる口噛み酒醸造のキーポイントである。口噛み酒の造り方が「風土記逸文（大隅の国）[14]」に見られる。

> **酒を造るをば「かむ」ともいふ。いかなる心ぞ。・・・大隅の国には、一家に水と米とを設けて、村に告げめぐらせば　男女一所に集まりて、米を噛みて、酒船（大きな容器：槽）に吐き入れて，散り散りに帰りぬ。酒の香出で来る時、又集まりて噛みて吐き入れ者共これを飲む。名づけて口噛みの酒と云うと、云々。**

すなわち、図 2 の第 1 ステップに示すように米などのデンプンを含む食物を口に入れて噛むと、唾液中の酵素アミラーゼが働きデンプンをグルコースなどに変化する。それを吐き出して溜めておくと、野生の酵母がグルコースを発酵してエチルアルコールが生成する（図 2 の第 2 ステップ）。この時、原料は生のまま口に入れて噛む場合、煮る・蒸すなどしたりする場合、更には酸敗させた後で口に入れて噛む場合がある。

沖縄地方では、身を清めた女性が生米を噛んだり、炊き立てのコメを丹念に噛んで容器に吐き出し、それに少しの水を加え、石臼で挽いてドロドロにして、甕に入れて発酵させ神酒を造っていた。一般には、甘酒程度の酒が醸されていたが、特別な場合には発酵を重ねて高いアルコール度数の酒も造られている。

古事記には応神天皇（第 15 代、在位 5 世紀前後）の父「仲哀天皇の条」にも噛み酒を造る様子が描かれている。建内宿禰命は太子（後の応神天皇）が禊をするため，高志前の角鹿（越前の敦賀：福井県敦賀市）に仮宮を建ててお迎えした。そして禊を終えて大和に迎え入れるとき、太子の母息長帯日売命（神功皇后）は太子にふさわしい神が醸した酒だとして献上して歌っている。

> **是に、還り上り坐しし時に、其の御祖息長帯日売命、待酒を醸みて献りき。爾くして、その御祖の御歌に曰く、**
>
> **この御酒は　我が御酒ならず　酒の司　常世に坐す　石立たす少御神の　神寿き　寿き狂し　豊寿き　寿き廻し　奉り来し御酒ぞ　止さず飲せ　ささ**
>
> **如此歌ひて、　大御酒を献りき。爾くして、建内宿禰命、御子の為に答へて、歌ひて曰く**
>
> **この御酒を醸みけむ人は　その鼓　臼に立てて　歌ひつつ　醸**

みけれかも　舞ひつつ　醸(か)みけれかも　この御酒(みき)の　御酒の　あやに甚楽(うただの)し　ささ
此(これ)は　酒楽(さかくら)の歌ぞ

（そして、太子が（大和に）帰り上っていらっしゃった時に、その母君息長帯日売命(おきながたらしひめのみこと)（神功皇后）は待酒(まちざけ)（無事の願いを込めて造る酒、5.4 項参照）を造って献上した。そうして、その母君がお歌いになっていうには、

この御酒は　私が醸した御酒ではありません　御酒をつかさどる神常世にいらっしゃって、岩神として（岩のように永続性をもって）立っていらっしゃる少名毘古那神(すくなひこなのかみ)が祝福のために踊り狂って醸し　祝福のために踊り廻って醸して、　献上してきた御酒です　一気にお飲みください　さあさあ。

このようにお歌いになって御酒をお勧めした。そこで建内宿禰命(たけのうちのすくねのみこと)が、御子の代わりに答えて歌っていうには

この酒を醸したという人は　その鼓を臼のように立てて　歌いつつ醸したからか　舞いつつ醸したからなのか　この御酒は　何ともいえず楽しいことです　さあさあ

この二首は酒楽(さかくら)（酒の座）の歌である。）

これらの記述から口噛み酒を造る様子が分かる。また、酒つくりは神に仕える巫女の仕事であり、酒が深く宗教と結びついていたことを窺わせる。なお、ここに登場する酒造の神としての少名毘古那神は大国主神(おほくにぬしのかみ)の国造りの完成に力を尽くしたほか、酒造・医薬・温泉・穀物・知識・石の神など多様な性質を持つ神話の神である。

同じく「応神天皇の条」に、

十九年の冬十月の戊戌(ぼじゅつ)の朔(ついたち)に、吉野の宮に幸(いでま)す。時に、国樔人(くにすひと)来朝(まいり)り。因りて醴酒(こさけ)を以ちて天皇に献(たてまつ)りて、歌(うたよみ)して曰(まう)さく
樫(かし)の生(ふ)に　横臼(よこすき)を作り　横臼に　醸(か)める大御酒(おほみき)
うまらに　聞(きこ)し持ち食(を)せ　まろが父

（十九年の冬 10 月 1 日、（応神天皇が）吉野の宮に行幸された。その時、国樔人(くにすひと)（現在の奈良県吉野町国栖の人）が来朝した。そして濃い酒を天皇に献じて、歌を詠んで、

樫の生えている所で横臼を作り　その横臼で醸した大御酒をおいしく召し上がってください　わが父（首長）よ。）

と申し上げた。ここに、醴酒(こさけ)は粕を分離せず、そのまま飲用する甘酒である。

4.1.2　口噛み酒による盟酒(うけいざけ)

古代、念願する物事の成就や成否や吉凶を占う祈誓(うけい)には酒を介在する例が

見られる。「盟」はお互いに交わした約束を神の前に誓うことを意味する。播磨国風土記の「託賀郡の条[14]」には

> **荒田と号くる所以は、此処に在す神、み名は道主日女命、父无くしてみ児を生みましき。盟酒を醸まむと為て、田七町を作りしに、七日七夜の間に、稲、成熟り竟はりき。すなはち酒を醸み、諸の神たちを集へ、その子を遣りて酒を捧げて養はしめき。ここに、その子、天目一命に向きて奉りき。すなわちその父なるを知りき。後に、その田荒れき。故れ、荒田の村と号すく。**

（道主日女命が、父がないのに赤子をお産みになった。（誰の子か）神意を聞くための酒を醸造しようとして、田七町を耕作したところ、七日七夜の間に稲が完全に熟しきった。そこで酒を醸造し、多くの神々を集め、その子を遣わして酒を捧げて奉らせた。さてその時、その子は、天目一命に向かって酒を奉った。そこでその子の父神であることが分かった。後に、その田が荒れ果てた。だから、荒田の村と名付けた。）ここに、天目一命は式内社である天目一神社（兵庫県西脇市大木町）の祭神で鍛冶師の奉じた神。長年、火の色を見つめる仕事のため、一眼を失ったとされる。ひょっとこ（火男）の原型であり、後述の天の石屋の神話にも登場する。

同様の盟酒の話は「風土記の逸文（山背国）[14]」にもある。要約すると、玉依日売が川遊びをしているとき、丹塗矢（真っ赤に塗られた矢）が流れてきたので、家に持ち帰り、寝床に挿し置いたところ、とうとう身ごもって男子を産んだ。その児が成人したとき、日売の父、賀茂建角身命が酒を醸し、神々を招待して七日七夜の酒宴を張った。そこで命が、児に「一座の神々の中でお前の父と思われる人にこの御酒を飲ませなさい」といった。すると児は天に向かって祈ろうとして天井を破って天に昇って酒を捧げたので、火雷神（命）が児の父と判明した。丹塗矢と称したのは、乙訓郡の社で祭られている火雷神のことである。

4.1.3　神話に出てくる酒

4.1.3.1　宗像三女神

古事記[15]の上つ巻の「天照大神と須佐之男命の条」には、伊耶邦技命（イザナキ）は 3 人の子どもにそれぞれ、天照大御神（アマテラス）は高天原を治め、月読命は夜之食国を知らせ、そして須佐男命（スサノオ）には海原を治めなさいと委任した。しかし、スサノオは仰せつかった国を治めないで大泣きに泣いたので、イザナキが何故そんなに泣くのかと聞くと「亡き母の国の根之堅州国に行きたいと思って泣くのです」と答えたので、イザナキは怒って、「それなら、この国に住んではならない」といって彼を

勘当し、自らは近江の多賀に鎮座した。そこで、スサノオは姉のアマテラスにお願いして母の国に行こうと高天原に行った。この時、山川はみなどよめき国土はすべて震えた。これを聞いたアマテラスは驚き、わが国を奪おうと思って攻めてきたに違いないと武装して待ち構え、「何のために上って生きたのか」と尋ねた。スサノオは、「私は亡き母の国に行きたいとイザナキに言ったら、神やらいに追い払われました。そこで、このような次第を申そうと思って参上しただけです。他心はありません。」と答えた。アマテラスは「それなら、お前の心が清らかなることはどのようにして知ろうか。」と問われると「それぞれ誓約をして子を産みましょう。」と申し上げた。そうして二柱の神は天の安の河を挟んで誓約する。その結果、5 男 3 女の神が生まれた。アマテラスは 3 柱の女神を産んだのである。

天照大御神、先づ建速須佐之男命の佩ける十拳の剣を乞ひ渡して、三段に打ち折りて、ぬなとももゆらに天の真名井に振り滌ぎて、さがみにかみて、吹き棄つる気吹の狭霧になれる神の御名は、多紀理毘売命。亦の御名は奥津島比売命と謂ふ。次に市寸島比売命。亦の御名は、狭依毘売命と謂ふ。次に多岐都毘売命

3 柱の女神たちはニニギノミコトの天孫降臨以前に天下った神たちである。宗像三女神としてそれぞれ、福岡県の宗像大社の三宮に鎮座した。古事記には、多紀理毘売命（日本書紀では田心姫神、以下同じ）は玄界灘の沖ノ島の沖津宮、市寸島比売命（市杵島姫神）は筑前大島の中津宮、そして田寸津比売命（湍津姫神）は宗像市田島の辺津宮に坐すとあるが、市寸島比売命と田寸津比売命はそれぞれ、辺津宮と中津宮に祭神として祀られている。

ここで、**さがみにかみて、吹き棄つる気吹の狭霧になれる神の御名は**（噛みに噛んで吐き出した息の霧になった神の御名は）は口噛み酒の造り方を連想させる。宗像大社は海陸交通の道の神として祀られているが酒の神であってもよいのではなかろうか。

4.1.3.2　須佐之男命の狼藉

日本の神話にアルコールハラストメントが登場する。アマテラスは、上述のように誓約によって上述の 3 柱の女神を産んだが、スサノオの方は、アマテラスの左右のみづら、かずら、そして左右の手などに纏った沢山の八尺の勾玉を噛みに噛んで吐き出した息の霧から 5 柱の男の神が生まれた。左右のみづらに巻いている玉から天之忍穂耳命と天之菩卑能命、かづらに巻いている玉から天津日子根命、左右の手に巻いている玉から活津日子根命と熊野久須毘命がそれぞれ生まれた。天之忍穂耳命と天之菩卑能命は二柱

ともに稲穂や農業の神であることから、ここでの「噛みに噛んで」は農耕で丹念に土地を耕す、すなわち、稲作に励むと解釈したい。

誓約の結果、弟神のスサノオは、

我が心清く明きが故に、我が生める子は、手弱女を得つ。
是に因りて言はば、自ら我勝ちぬ

と勝ちを宣言し、姉アマテラスの田の畔を壊し、溝を埋め、大嘗祭をする御殿に糞をまき散らした。しかし、姉神はそれを咎めずに、次のように言った。

屎の如きは　酔ひて吐き散らすとこそ　我がなせの命　如此為つらめ　又、田のあを離ち　溝を埋は　地をあたらしとこそ　我がなせの命　如此為つらめ

（屎のようなものは酔って吐き散らそうとして私の弟の命がそうしたものでしょう。また、田の畔を壊し、溝を埋めたのは、土地がもったいないと思って私の弟の命がそうしたのでしょう。）と弟神をかばった。スサノオの乱暴狼藉は、酩酊が引き起こすアコールハラスメントが古代から社会問題となっていたことを示している。姉神の弁護にもかかわらず、スサノオの悪い行いは止まらず、さらに悪行を為したので、アマテラスは見て恐れ、天の石屋の戸を開き中に籠ってしまったので、高天原も葦原中国はすっかり暗くなってしまう。そこで、神々が安の河原に集まって相談して、八尺の鏡を作るなどいろんな手立てをした。最後に、天宇受売命が神がかりして胸の乳を露出させ、裳の紐を女陰まで押し垂らすと高天原が鳴り響くほど八百万の神々がどっと笑った。アマテラスは不思議に思って天の石屋を細く開けて天宇受売命に「なぜ歌舞をして大笑いしているのか」と聞くと

汝が命に益して貴き神の坐すが故に、歓喜び咲ひ楽ぶ

と答えた。その間に天児屋命と布刀玉命が八尺の鏡を差し出してアマテラスに見せると、少しづつ出てきて鏡に映った自分の姿を見た。その時、天手力男神がアマテラスの手を取って引き出した。そして、高天原と葦原中国は明るくなった。以上がよく知られた天の石屋の神話である。ここに、

・・・天の金山の鉄を取りて、鍛人の天津麻羅を求めて
・・・鏡を作らしめ・・・

と天津麻羅に八尺の鏡をつくらせているが、この神は4.1.2項で取り上げた天目一命の別名で、製鉄・鍛冶の神である。

4.1.3.3　須佐之男命の大蛇退治

高天原で乱暴狼藉を働いたスサノオは

是に、八百万の神、共に議りて、速須佐之男命に千位の置戸を負ほせ、亦、髭と手足の爪を切り、祓へしめて、神やらひやらひき

（そして、すべての神々は一緒に相談してスサノオにたくさんの祓えものを背負わせ、また、髭と手足の爪を切り、罪をあがなわせて、神遣らいに追い払った。）その結果、高天原を追いやられたスサノオは出雲国に下った。スサノオが酒で八岐大蛇を退治した件はよく知られている。

乃ち脚摩乳・手摩乳をして八醞の酒を醸み、併せて仮庇八間を作り、各　一口の　槽　を置き、酒を盛らしめて待ちたまふ。期に至りて、果たして大蛇有り。

（そして、脚摩乳・手摩乳に命じて幾度も繰り返し醸した上等な酒を造らせ、併せて桟敷を八つの間数作らせ、各々に一つずつの酒桶を置いて、酒を満たさせて八岐大蛇が来るのを待っておられた。その時が到来して、果たして大蛇がやってきた。）酒は米を噛んで造るので「醸」をカムと読み、八醞の酒とは幾度も噛んだ醇度の高い酒である。槽という飼い葉桶のような大きな容器に入れ、大蛇を神として神酒を供薦している。

4.1.3.4　神武天皇の東征

日本書紀[16]によると、高天原に降臨した瓊瓊杵尊の曽孫である神日本磐余彦尊（イワレヒコ：後の神武天皇）はヒコナギサタケウカヤフキアエズノミコトとタマヨリヒメの子である。イワレヒコは、

東　に美地有り。青山四周れり。其の中に、亦天磐船に乗りて飛び降る者有り

と聞いては東征の途に就いた。神武東征である。日向を出て瀬戸内海を東に向かい、難波の岬に到着した。次いで生駒山（大阪と奈良の県境の山）を越えてイワレヒコ軍が進攻しようとしたが先住民の長髄彦軍の反撃に出遭ったので退却して、熊野（和歌山）に至った。その後、頭八咫烏に先導されて内陸部の菟田に到着した。そこでイワレヒコは兄猾と弟猾の 2 人を召したところ弟猾はすぐに来たが、兄猾は来ずに天皇を殺そうと企んでいた。それを知った天皇は兄猾を殺した。その後、弟猾は牛肉と酒を取り揃えてイワレヒコ軍を労い饗宴した。

己にして弟猾、大きに牛酒を設けて皇師を労ぎ饗す。天皇、その酒宍を以ちて軍卒に班ち賜ひ・・・

その後、イワレヒコノは大和国畝傍の橿原の宮で神武天皇として即位した。ここに登場する長髄彦にしても兄猾と弟猾にしても先住民を差別した呼び名である。天孫族は侵攻してきた列島の新しい征服者で、被征服者の先住民族は征服者に結構な酒肴のモテナシをしたのである。

4.2　コウジカビを用いた醸造酒

4.2.1　醸造法の伝来

前項で述べた古事記の「仲哀天皇の条」に続く、「応神天皇の条」にコウジカビによる酒造法が百済から伝わったと考えられる記述がある。百済は和邇吉師に論語と千字文を応神天皇（5 世紀前後）に献上させるとともに、酒の醸造を知っている須須許理を送ってきたのである。

> **・・・酒を醸むことを知れる人、名は仁番、亦の名は須須許理等と、参ゐ渡り来たり。故、是の須須許理、大御酒を醸みて献りき。是に、天皇、是の献れる大御酒にうらげて、御歌に曰く、須須許理が　醸みし御酒に　我酔ひにけり　事無酒　笑酒に　我酔ひにけり如此歌ひて・・・　」**

（・・・酒の醸造を知っている人で、名は仁番、またの名は須須許理という者とが渡来してきた。そしてこの須須許理は、御酒を造って献上した。その時、天皇は、この献上された御酒を飲んで気持ちが愉快になって、お歌いになっていうには、「須須許理が醸した酒に　私はすっかり酔ってしまった無事平安になる酒　笑いたくなる酒に　私はすっかり酔ってしまった」とお歌いになった・・・。）須須許理が伝えたのは口噛み酒の造り方ではなくコウジカビを使った醸造酒の製法であろう。

一方、「播磨国風土記」にもコウジカビによる酒の醸造の記述がみられる。

> **庭音の村。本の名は庭酒なり。大神の御粮、沾れて黴生えき。すなわち酒を醸ましめて、庭酒に献りて、宴く。故れ、庭酒の村と日ふ。今の人は庭音の村と云ふ**

とあり、コウジカビを用いた酒の醸造が行われていたことを示している。すなわち、古代、日本列島では口噛みによる酒がコウジカビによる酒に移行していったのである。長崎県対馬市厳原町豆酘にある多久頭魂神社の赤米神事で備える酒は麦コウジで発酵させたままの酒だそうだ[17]。遅くとも奈良時代の初期に麹を用いた酒造りの技術が伝来しており、列島の醸造法は飛躍的に発展した。日本酒の醸造が本格化したのである。

4.2.2　酒造り唄

持統 3 年（689 年）に飛鳥浄御原令に基づいて造酒司に酒部が設けられた。文武天皇（第 42 代、在位 697－707）の大宝元年（701 年）には大宝律令によって朝廷のための酒の醸造体制が整備された。その後、寺院でも、僧坊酒[18]を造り出している。酒部は杜氏の意もある。杜氏たちは新酒の仕込みのときは酒造りの唄を歌う。これは酒造りの各工程で幾人かの杜氏たちが調子を合わせて同一の作業をするタイミングをとる意味と作業時間を計る意味もあるという。万葉集に古代の酒造りの唄が採録されている

梯立の　熊来酒屋に　真罵らる奴　わし
誘ひ立て　率て来なましを　真罵らる奴　わし　（3879）

（梯立の熊来の酒屋にどなられている奴よ　ワシ　誘い立てて連れて来てしまいたいのに　どなられている奴よ　ワシ。）ここに、酒屋は大勢の奴婢が働いていたであろう醸造所のことで、この歌は奴婢らの自嘲と願望がある労働歌であろう。また、大伴家持も「酒造りの歌一首」として詠っている。

中臣の太祝詞言いひ祓へ贖ふ命も誰がために汝　（4031）

（中臣の唱える立派な祝詞を誦じ　祓いをし　祈る命も　誰のためか　他ならぬあなたのためだ。）醸造の際に唱える歌であるが、家持が醸造歌に託して詠った戯歌と思われる。

ここに、中臣は神事・祭祀を司った氏族である。中臣氏の中でも中臣鎌足は蘇我氏を滅亡に追いやった「乙巳の変」に参画し、天智天皇から藤原姓を賜っており、鎌足の系統だけが藤原姓を名乗ることが許され、祭祀を司る氏族から、奈良・平安時代を通じて一大政治勢力に変貌する[7、19]。

4.2.3　酒誉めの歌

常陸国風土記の「香島の郡の条[14]」に

又、年別の四月十日に、祭を設けて酒を灌む。卜氏の種属、
男も女も集会ひ、日を積み夜を累ね、飲み楽しび歌い舞ふ。
その唱に云はく、あらさかの　神のみ酒を　たげたげと
言ひけばかもよ　吾が酔ひにけむ

（また、毎年の四月十日に、祭を行って酒宴をする。卜部氏の同族は、男も女も集まり、何日も何日も、幾夜も幾夜も、酒を飲み楽しみ歌い舞う。その唱う歌に次のように言う。新しく醸造した神酒を、飲め、飲めと、あなたが上手に勧めたからだろうな、私はすっかり酔ってしまったようだ。）

卜部氏は神社に属して卜占を職とする氏族。「あらさかの神のみ酒」は新しい精の強い良い、神から戴いた酒のこと。この歌は酒をほめて宴を謝する歌である。

4.2.4　オンーザーロック

日本書紀の「仁徳天皇の条」に酒に関する興味深い記述がある。仁徳天皇の弟である額田大中彦皇子が闘鶏（奈良県山辺郡付近）で猟をしたとき、山頂から野中を見ると廬（草木で作った仮の小屋）があり、使いをやって調べさせると窟であった。そこで、闘鶏稲置大山主を召し出して尋ねた。問答は次のようである。

「其の野中に有るは、何の窟ぞ」

「氷室なり」
「其の蔵　如何にぞ。亦奚にか用ふ」
「土を掘ること丈余、草を以ちて其の上に蓋ふ。敦く茅・荻を敷き、氷を取りて其の上に置く。既に夏月を経て泮えず。其の用ふこと、即ち熱月に当りて、水酒に漬して用ふなり」

この時代すでにオンーザーロックを嗜んでいたのである。弟皇子がその氷を持ち帰って仁徳天皇に献上した。天皇はこれを歓び、以後後、毎年、12月には氷室で氷を貯蔵し、春分の頃になると初めて氷を分けたという。

4.2.5　禁酒令

前述（**4.2.2 項**）したように、造酒司に酒部が設けられたのは持統朝の689 年であるが、それ以前に、すでに禁酒例が見られる。日本書紀によれば、孝徳天皇（第 36 代、在位 645～654 年）が「大化の改新」の詔を下した翌年の大化 2 年に禁酒の詔を発している。

凡そ畿内より始めて四方の国に及るまでに、農作の月に当たりては、早く営田ことを務めよ。美物と酒とを喫はしむべからず

また、持統天皇（第 41 代、在位 690～697）の持統 5 年（691 年）、この年の夏の長雨は季節外れであるので必ず農耕に被害が出るだろうと案じて、

夕に惕み朝に迄までに憂懼り、厥の愆を思念ふ。其れ、公卿・百寮人等をして、酒・宍を禁断めて、摂心悔過せしめよ

これらに禁酒令の以降にもたびたび、災害・旱魃・飢饉・疫病の流行や酒乱による騒擾を防ぐために禁酒や群飲酒禁止の詔が下されている。聖武天皇（第 45 代、在位 724～749）の天平 4 年（732 年）と天平 9 年（737 年）に禁酒令が出ている。その間の天平 7 年の疫や飢饉の大流行は大仏建立の引き金となって、大仏造立の際にも酒肉と殺生が禁じられている。また、疫病が蔓延していて、集まって酒食を行うことが病気の伝染の原因と考えられ、天平 18 年（746 年）に「群飲厳禁令」の詔が発布されたのであった。さらに、禁酒令は天平宝字 2 年（758 年）にも酒乱大流行のため発布されている。

5.　万葉集の酒の歌

5.1　祭祀と酒

宗教ごとに酒の扱いは異なる。仏教では、飲酒は避けるべき悪徳であり苦しみを生み出すものとされる。尤も有力寺院では僧坊酒[18]が造られていたが。一方、飲酒による陶酔感が神秘なものと考えられるようになり神に関わる宗教儀礼に結びついていった。我が国の神道では、酒は敬神信仰と深く関わり、儀式に用いられる御神酒は神への捧げものであると同時に自らの身体

を清め、神との一体感を高めるための飲み物でもある。すなわち、飲酒という行為は神聖な行事そのものであった。現在でも、神殿に神酒を供えて祭祀するほか、地鎮祭では敷地の四方に酒を注いで工事の安全を祈ったりするのは奈良時代からの風習である。

信仰の対象となる酒神は具体的に定められており、ギリシャ神話ではバッカス（ディオニソス）であるが、わが国の代表的な酒神の一柱（ひとはしら）は大物主（おおものぬしの）大神（おほかみ）であり、大神が鎮まるのは三輪山の大神（おほみわ）神社である。奈良県桜井市にある三輪山は大神神社の御神体であり、杉は神杉として神聖視され、杉の葉で作った杉玉が酒つくりと酒蔵のシンボルとなって今に伝わっている。

万葉集に採録された三輪山を詠った歌の枕詞（まくらことば）は味酒（うまさけ）である。例えば、

味酒（うまさけ）の三諸（みもろ）の山に立つ月の見が欲（ほ）し君が馬の音そ為（す）る　　（2512）

（味酒の三諸の山に立つ月のように見たいと思うあなたの馬の音がする。）三諸山は神が憑く三輪山のこと。

額田王が近江国に下ったときに詠んだ歌も枕詞は味酒である。

味酒（うまさけ）　三輪の山　あおによし　奈良の山の　山の際（ま）に　い隠るまで
道の隈（くま）　い積るまでに　つばらにも　見つつ行くかむを　しばしばも
見放（みさ）けむ山を　情（こころ）なく　雲の　隠さふべしや　　（17）

（味酒の三輪山が　青土も美しい奈良の山の山際に隠れるまで　幾重にも道を折り重ねるまで　幾度も望み続けていこう山を　心なく雲が隠すべきだろうか。）額田王が近江に下ったのが天智天皇の近江遷都のときならば天智 6 年（667 年）に詠われたことになり、大和を離れるに際しての儀礼の歌であろう。

酒が神を祭る行為と結びついていたことを表す歌がある。

斎串（いくし）立て神酒（みわ）坐（す）ゑ奉（まつ）る神主（かむぬし）部の髻華（うず）の玉蔭（たまかげ）見れば羨（とも）しも　　（3229）

（玉ぐしを立て神酒を据えてお祭りする神職（巫女）たちが髻華にさした玉かずらを見ると珍しいことよ。）髻華（うず）は髪飾りのことで冠に付けることがあるが、髻（もとどり）（髪を頭の頂に束ねた部分）にも挿した。

新嘗祭に臨み、長皇子（ながのみこ）の子で文室智努真人（ふむやのちぬのまひと）が詠んだ歌は酒を古語であるキと詠んで祭儀の慣行を表している。

天地と久しきまでに万代に仕へまつらむ黒酒（くろきし）白酒（しろき）を　　（4275）

（天地が続く限り共に永遠に　万代にお仕えしましょう黒酒白酒を捧げて）

新嘗祭は宮中行事で収穫祭にあたる。皇極天皇（第 35 代、在位 642～645 年）の時代に始まり、天皇が五穀の新穀を天神地祇に勧め、その年の収穫に感謝する行事のである。黒酒は神前に供えた酒で醸造した甘酒に久佐木の焼灰を入れた灰持（あくもち）酒であり、入れないものが白酒。

長皇子は、キトラ古墳の被葬者ではないかといわれる天武天皇と持統天皇

の皇子である。また、文室智努真人は元正・聖武・孝謙・淳仁天皇に仕えた皇族であるが孝謙朝で臣籍降下している。

大伴家持が祭儀のときに詠った歌では酒器に柏の葉を使っている。

皇神祖の遠御代御代はい布き折り酒飲みきといふそこのほほがしは

（4205）

（皇祖―天皇の祖先―たちの御代御代には　広げ畳んで酒を飲んだということよ　このホオガシワは。）古代の食器であった柏の葉を筒状にして酒器として酒を飲んでいる。料理人のことを膳夫というのは柏の葉に食物をもったことに由来する。

柏の葉を酒器に用いた興味深い話は、古事記の「仁徳天皇の条」にもある。仁徳天皇の皇后である大后石之日売命は嫉妬心の強い人であったので、天皇に仕える妾は宮中に入ることができなかった。仁徳天皇が吉備の黒日売に恋して、大后を欺いて、「淡路島を見たいのだ」と騙して、吉備国まで行幸した。こんなことがあった後の話である。皇后石之日売命が神事に使うために盃用の柏の葉を採りに紀伊國まで採りに行っている間に、又もや好色の仁徳天皇は異母妹の八田若郎女と結ばれた。それを知った皇后は恨み怒って、船に満載してあった柏の葉を全部海に投げ捨ててしまったという話である。

此より後時に、大后、豊楽せむと為て御綱柏を採りに、木国に幸行しし間に、天皇、八田若郎女に婚ひき。・・・倉人女が船に遭ひき。乃ち、語りて云ひしく、「天皇は、比日八田若郎女に婚ひて、昼夜戯れ遊ぶ。若し、大后は此の事を聞こし看さぬか、静かに行幸す」といひき。是に、大后、大きに恨み怒りて、其の御船に載せたる御綱柏をば、悉く海に投げ棄てき・・・・

（此れより後のこと、皇后が、酒宴を催そうとして、御綱柏を採りに紀伊國にお出かけになっていた間に、仁徳天皇は、八田若郎女と結婚した。・・・倉人女の船に出会った。そして語って言うには、「天皇は、このごろ八田若郎女と結婚して、一日中戯れ遊んでいます。ひょっとして皇后はこの事をご存じないのでしょうか、のんびりと遊び歩いていらっしゃる」と言った。
・・・それを聞いた皇后はひどく恨み怒って、その船に載せてあった御綱柏を、すっかり海に投げ捨ててしまった・・・　。）

この後、皇后は山城国を経て、大和には入らず綴喜（京都府綴喜郡田辺町付近：京田辺市）の韓人の家に引き籠ってしまった。これを和めて破綻なくあらしめることが理想的な天皇の色好みの姿である。御綱柏はウコギ科の小高木カクレミノの葉であろう。告げ口した倉人女とは皇后の身近に仕える女官である。

5.2　挽歌にみる酒と神

高市皇子が薨(みまか)ったので柿本朝臣人麻呂が殯宮(あらきのみや)のときの詠んだ長歌（199）があり、この長歌に続いて短歌二首（200、201）があり、さらに反歌として檜隈女王(ひのくまのおおきみ)が高市皇子の死を悼み、泣沢神社の女神を怨んで詠んだ挽歌がある。

泣沢(なきさわ)の神社(もり)に神酒(みわ)すゑ禱(いの)祈れどもわが大君は高日知らしぬ　（202）

（泣沢の女神に命のよみがえりを願って　神酒を捧げて祈るのだが　わが大君は　高く日の神として天をお治めになってしまった。）

ここに、高市皇子は天武天皇の長男であるが、天武朝では「吉野の盟約[19]」に参加した 6 人の皇子の内で草壁皇子と大津皇子に次ぐ第 3 番目の地位にあった。天武天皇の崩御の後、大津皇子が謀反の罪で死罪となり、また、皇太子であった草壁皇子も薨御したため、皇后であった鸕野讃良(うののさらら)皇女が持統天皇（第 41 代、在位 690～697 年）として即位した。太政大臣となった高市皇子は皇族と臣下の筆頭となり持統政権を支えている。なお、歌聖とされ、万葉集に多数の歌を残した柿本人麻呂は主に持統天皇の時代に活躍した官人でかつ歌人である。しかし、万葉集が柿本人麻呂に関する唯一の資料であって彼の経歴はよく分かっていない。

5.3　相聞歌

味酒(うまさけ)を三輪の祝(はふり)がいはふ杉手触(てふ)れし罪か君に遇(あ)ひがたき　（712）

（三輪の神官が祀る杉のように　畏れ多いあなたの手を触れるようなことをした罰でしょうか　その罪によって再び君に会い難いことよ。）この杉は、大物主(おおものぬし)が宿る三輪の神杉であって実際に手を触れたのではなく、高貴な人に恋するような犯し難きを犯したことを丹波大女娘子(たにはのおほめのおとめ)が詠っている。身分違いの相手と契ったが、その後、逢えなくなってしまったのだ。大物主は、大国主(おほくにぬしのかみ)神とともに国造りをしていたスクナヒコノカミが常世の国に去ったあと海の向こうから現れた神で蛇神・水神・来神である。大神神社(おほみわじんじゃ)に献じる神酒を盛る土器(すえ)を特に三輪の於喜寿恵(おきすえ)といい、使った後は壊して二度と使わず清浄さを表現している。なお、丹波大女娘子(たにはのおほめのおとめ)の素性は不明である。

丹生女王(にふのおおきみ)が大宰府の帥大伴旅人に贈った歌も相聞歌である。

古(いにしえ)の人の食(き)こせる吉備の酒病めばすべなし貫簀賜(ぬきすたば)らむ　（554）

（昔の人が召し上がったという吉備の酒も病気の私には無用のものです　ご当地に名高い貫簀を下さいまし。）吉備国は稲作が盛んで美味しい酒が当時からよく知られていたようだ。九州へ下る途中の 64 歳の大伴旅人からその味酒を贈られた丹生女王は貫簀が欲しいといっている。彼女も結構な年齢と思われ、酒好きでも病気になると飲まなかったようだ。ここに、貫簀は手を

洗う時に水が飛び散らないように盥の上に置く細く切った竹を糸で編んだ簀の子だという説と、身を横たえたとき肌に心地よい竹で編んだ莚（敷物）だという説がある。

5.4　待酒

待ち酒は訪ねて来る人に飲ませようと、あらかじめ造っておく酒のこと。4.1.1 項の「仲哀天皇の条」も待酒の物語である。大伴旅人が太宰帥であったとき、大弐丹比県守卿が民部卿に遷任したときに待酒の歌を詠んで贈っている。呑み友達がいなくなることを想って詠んだ歌である。

君がため醸みし待酒安の野に独りや飲まむ友無しにして　　（555）

（あなたのためにと造ってきたもてなしの酒を　私は一人で安の野に飲むのでしょうか　酌む友もなく。）時は天平元年（729 年）2 月 11 日かともいわれる。安の野は現在の福岡県朝倉郡夜須町で大宰府の東南にある。もう一首、待酒を挙げる。

味飯を水に醸みなしわが待ちし代はさねなし直にしあらねば　　（3810）

（うまい飯を水とともに噛んで酒とし　私が待ち続けた甲斐は全くない本人が来ないので。）この歌には、「昔一人の娘子がいた。その夫と別れ、恋しく待ち望みつつ年を経た。時に夫の君はさらに別の妻を娶って、生身（本人）は来ないでただ贈り物だけをよこした。そこで娘子がこの恨みの歌を作って返事した」という詞書きがある。身分違いの相手と契ったが、その後、逢えなくなってしまったというのだ。

5.5　酒宴の歌

5.5.1　推古天皇の酒宴

推古天皇 20 年、天皇は 1 月 7 日に人日と称する祝宴を催している。人日は中国の習慣で、この日の天候でその年の運勢を占い、晴れならば幸いがあり、曇りなら災いがあるという。民衆は酒食をもって山に登ったり様々な行事をし、宮中でも宴を設けた。日本書紀のこの条は日本における人日の初出である。

二十年の春正月の辛巳の朔にして丁亥に、置酒して群卿に宴す。是の日に、寿上りて歌して曰さく、

やすみしし　我が大君大臣の　隠ります　天の八十蔭　出で立たす
みそらを見れば　万代に　かくしもがも　千代にも　かくしもがも
畏みて　仕へ奉らむ　拝むみて　仕へまつらむ
歌づきまつる

とまをす。天皇、和へて曰はく、

真蘇我よ　蘇我の子らは　馬ならば　日向の駒　太刀ならば
呉の真刀　諾しかも　蘇我の子らを　大君の　使はすらしき

（人日に群卿に酒を振舞って宴会が催されたとき、大臣蘇我馬子は酒盃を献じて歌を詠んだ。

我が大君がお隠りになる広々とした宮殿　またお出ましになって
御空をみますと　千代も万代もこのように立派であってほしいものです
私どもは畏み崇めてお仕え申し上げましょう
この祝い歌を献上いたします

と申し上げた。天皇はこれに和されて

真蘇我よ　蘇我一族の人々は　馬でいえば日向の良馬　太刀でいえば
呉の利剣だ　もっともなことだ　蘇我一族を大君がお使いになるのは）

蘇我馬子は敏達（第 30 代、在位 572～585 年）・用明（第 31 代、在位 585～587 年）・崇峻（第 32 代、在位 587～592 年）・推古天皇（第 33 代、在位 592～628 年）の 4 代の天皇に大臣として仕え、「丁未の乱[19]」で廃仏派の仇敵大連物部守屋を討滅し、馬子の専横に憤った崇峻天皇を逆に暗殺するなど専横を極めた。

5.5.2　皇子らの歌

天智天皇の皇子で「吉野の盟約[19]」に参加した志貴皇子の子で万葉後期を代表する歌人である湯原王が打酒（酒を飲むこと：酒宴）の歌を詠っている。

焼太刀の稜打ち放ち大夫の禱く豊御酒にわれ酔ひにけり　（989）

（焼太刀の角を鋭く打って　雄々しい男子が祈りを込めるりっぱな酒に　私は酔ってしまった。）焼太刀は鍛え上げた太刀のこと。酒を豊御酒といい、飲むとき太刀を振って酒を祝福する酒ぼめの儀礼があった。そして楽しく飲んだ。

湯原王は政争から逃れ、風流を貫いた人といわれている。兄弟の白壁王は光仁天皇（第 49 代、在位 770～781 年）として即位している。

高市皇子の皇女で長屋王の妹の河内女王が橘諸兄の屋敷に元正太上天皇（第 44 代天皇としての在位 715～724 年）の行幸を仰いで宴を開いたときに参席して詠んだ歌がある。

橘の下照る庭に殿建てて酒みづきいますわが大君かも　（4059）

（橘の実で木の下が照り映える庭に御殿をお建てになって　酒宴を催しておられる我が大君よ。）高市皇子は、前述のように、天武天皇の第一皇子なので皇太子に就くべきであるが、母親が身分の低い出身であったため、天武天皇と皇后鸕野讃良皇女（後の持統天皇）との子草壁皇子が皇太子の地位に就

いたのである。また、河内女王の兄の長屋王は藤原不比等の死後、皇親勢力の巨頭として政界の重鎮となったが藤原四兄弟（武智麻呂、房前、宇合、麻呂）と対立し、聖武天皇の即位後藤原氏の光明子の立后に反対するも讒言により、いわゆる「長屋王の変」によって自死に至らしめられた。ここに、橘諸兄は光明子（後の光明皇后）の異父兄である。

5.5.3　春の酒宴

古来、酒宴は屋内だけでなく遊び酒として屋外において、花・月・雪を求めて風流な宴を催している。そして春も秋も万葉人はこよなく酒を愛した。

まず、春に酒を詠った歌を挙げる。万葉集の代表的な歌人で大伴旅人の異母妹である大伴坂上郎女（おおとものさかのうえのいらつめ）が盃に浮かぶ梅の花を歌っている。

酒坏（さかづき）に梅の花浮け思ふどち飲みての後は散りぬともよし　　(1656)

以下の歌は、大宰府の帥大伴旅人が催した「観梅の宴」で歌われたものである。当時、梅は外来の植物として珍重された。

笠沙弥（かさのさみ）は詠う。

青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし　　(821)

（青柳と梅の花を折って翳（かざ）して酒を飲む　さあこの後は散ってしまってもよい。）

ホストである大伴旅人も、勿論、詠っている。

我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも　　(822)

（我が庭に梅の花が散る　天涯の果てから雪が流れ来るよ。）落花を雪とみている。旅人が梅と雪の取り合わせに興じた歌には別の酒宴で詠んだもう 1 首、

わが岳を盛りに咲ける梅の花残れる雪をまがへつるかも　　(1640)

もある。

大宰府大令史（だいりょうし）の野氏宿奈麿（やしのすくなまろ）の歌。

毎年（としのは）に春の来（きた）らばかくしこそ梅をかざして楽しく飲まめ　　(833)

（年ごとに春がめぐり来れば　このようにこそ　梅を翳して楽しく酒を飲もう。）

壱岐目（いきさかん）の村氏彼方（そんしをちかた）の歌

春柳（はるやなぎ）縵（かづら）に折りし梅の花誰（たれ）か浮べし酒坏（さかづき）の上（へ）に　　(840)

（春の柳を縵（かづら）にとて折ったことだ。梅の花も誰かが浮かべている酒盃の上に。）

最大の万葉歌人である大伴旅人が、上の酒宴以外に詠んだ梅と酒を詠んだ歌をもう一つ挙げる。

梅の花　夢（いめ）に語らく　風流（みや）びたる　花と我（あれ）思（も）ふ　酒に浮べこそ（852）

（梅の花が夢に語ることには　風流な花だと私は思う　さあ酒に浮かべてほしい―空しく私を散らしてしまうな。）この歌は大伴旅人の作と思われるが、作者の願望を詠った別案がある。「**花と我（あれ）思（も）ふ　酒に浮べこそ**」を「**いたずらに我を散らすな酒に浮べてこそ**」でもよいというのだ。

万葉集第 17 巻に大伴家持が天平 20 年 3 月 3 日の晩春、野に遊んだときに掾大伴池主に贈った七言の詩（漢詩）がある。書き下し文で示す。

余春の媚日は怜賞れぶに宜く
上巳の風光は遊覧するに足る
柳陌は江に臨みて袨服を縟にし
桃源は海に通ひて仙舟を浮ぶ
雲罍に桂を酌みて三清を湛へ
羽爵は人を催して九曲に流る
縱酔に心を陶して彼我を忘れ
酩酊し処として淹留せぬはなし

暮春の魅力的な日は称賛するにふさわしく
三月三日の風光は遊覧するに足りる
堤に生えた柳は入江に臨んで美しい服装をいやが上にも飾り
仙境は海に通じて　神仙の舟が海に浮かんでいる
雲雷を刻んだ酒樽に香り高い酒を酌んで　もって清なる酒にひたり
羽模様の盃は酌むことを勧めながら曲水を幾重にもめぐり流れる
酔うままに心は陶然となってすべてを忘れ
酩酊して　どことて飽きる所はない

3 月 3 日の「上巳の節」には曲水の宴を催すことが習慣となっていた。桂酒は酒に桂の樹皮を入れたもの。三清は道教の三人の最高神格のことであるがこれを三種の酒に例え、第三を清酒といい、聖人の隠語である。

5.5.4　秋の酒宴

秋の歌がある。大伴坂上郎女が家族と宴会したときに詠っている。

かくしつつ遊び飲みこそ草木すら春はもえつつ秋は散りゆく　（995）

（このようにずっと楽しみ酒を飲みたいものよ　変わらず見える草木だって春は生い茂りつつ　秋には散ってしまうことだ。）上掲の 1656 番は春の酒宴であったがこの歌は秋の草木を例えに出して人生のはかなさを詠い、この宴会のときを思う存分楽しんで下さいと言っている。

秋の行楽の歌を挙げる。天平勝宝 5 年（753 年）8 月 12 日に二，三人の廷臣たちが壺に入れた酒を携えてなら東部の高円の野に昇り、いささかの所感を託して作った歌三首の一つが左京少進大伴宿禰池主の歌である。

高円の尾花吹き越す秋風に紐解き開けな直ならずとも　（4295）

（高円のススキを吹きすぎる秋風によって衣の紐を解こうではないか　妻の直手ならずとも。）ここに、「紐解き開けな直ならずとも」は秋風が激しく衣を翻す様子を見て戯れに詠っている。恋人同士が紐を解くのではないがお

互いに心を許して―胸襟を開いて―交歓しようではないかと秋のハイキングのときに詠ったのである。

柿本人麻呂も秋の酒を賛美している。

我が衣色付け染めむ味酒三室の山は黄葉なりけり　(1094)

（私の衣に色を付けて染めよう　味酒の三室の山は紅葉していることだ。）三室山は神が降臨する三輪山の別称である。

作者不詳だが旋頭歌に官人たちの月見の酒宴で詠んだ歌が採録されている。

春日なる三笠の山に月の船出づ遊士の飲む酒坏に影に見えつつ（1295）

（春日の三笠の山に船のような月が出た　風流な人びとの飲む酒盃のなかに映って見えながら。）月の舟は舟のような三日月のこと。風流を好む大宮人の繊細な美を愛でる貴族趣味が横溢している。

「酒」という字は詠い込まれていないが穂積親王が酒宴の酣のときに好んで詠んだ歌が面白い。

家にありし櫃に鍵刺し蔵めてし恋の奴のつかみかかりて　(3816)

（家にあった櫃に鍵をかけてしまっておいた恋の奴めが私につかみかかってきて。）穂積親王は天武天皇の第五皇子で高市皇子妃である但馬皇女との悲恋が知られている。密通事件を起こしたか。穂積親王は文武天皇（第 42 代、在位 697～707 年）から元明天皇（第 43 代、在位 707～715 年）の時代に藤原不比等とともに政権を支えた。彼は高松塚古墳の被葬者ではないかともいわれている。

最後に、禁酒令が出されたときの歌を挙げておく。

官にも許し給へり今夜のみ飲まむ酒かも散りこすなゆめ　(1657)

（政府もお許しになっていますから今夜だけ飲む酒でありましょうか　梅よ散るなよ　決して。）この歌は、聖武天皇の天平 9 年（737 年）2 月に下された詔、「都の中で宴会を開いてはいけない。ただし、親しい者同士が一人二人で飲み楽しむことは許す」という禁酒令に答えて詠ったものであろう。

5.6　餞別の酒宴

聖武天皇が節度使を送り出すときに詠った賜酒儀礼の歌である。

食国の　遠の朝廷に　汝等の　かく退りなば　平けく　われは遊ばむ　手抱きて　われは在さむ　天皇朕　うづの御手もち　かき撫でそ　労ぎたまふ　うち撫でそ　労ぎたまふ　還り来む日　相飲まむ酒そ　この豊御酒は　(973)

（支配なさる国土の　遠い朝廷たる各地の府に　お前たちがこのように赴いて行ったなら　私は平穏に安心していよう　手を組んだままで私は居よう　天皇たる私が貴いこの手をもって　かき撫でて労をねぎらいなさる　うち撫

でねぎらいなさる　お前たちが無事帰還するだろう日にともに飲むべき酒であるよ　この立派な御酒は。）食国は「支配する」を意味する。節度使は、唐の制度に倣い、地方の軍政と防備を任務とした軍団を統括する臨時の官職で天平 4 年（732 年）に初めて設置され、天平宝字 5 年（761 年）にも置かれた。この歌は、天平 4 年、藤原房前を東海と東山道、藤原宇合を西海道、多治比県守を山陰道にそれぞれ派遣したときのもの。この歌は聖武天皇が節度使に酒を賜るときに添えた歌であるが、歌中に敬語が使われていることから実作者は中務省の役人であろう。

遣唐使の出発に際して送別の宴会が開かれた。孝謙天皇（第 46 代、在位 749～758 年）は天平勝宝 4 年（752 年）藤原房前の子藤原清河を入唐大使に命じ、吉備真備を副使として、皇帝玄宗が君臨する全盛時代の唐に遣唐使を送った。次の歌は孝謙天皇が「餞送の儀礼」として大使藤原清河に酒肴を賜ったときに併せて贈った歌である。

そらみつ　大和の国は　水の上は　地行く如く　船の上は　床に坐る如　大神の　鎮へる国そ　四の船　船の舳並べ　平安けく　早渡り来て　返言　奏さむ日に　相飲まむ酒ぞ　この豊御酒は　（4264）

（空に満ちる大和の国は　人々が水上にいても地上を行くように　船上にあっても建物の床にいるように　安らかに大神がお守りなさる国であるよ　四隻の船が舳先を並べて無事　早々と行って来て　返事を奏上するだろう日に共に飲む酒ぞ　このありがたい酒は。）藤原清河を入唐大使とする遣唐使のもう一人の副使として大伴胡麻呂がいる。宮門を守る衛門府の長官であった大伴古慈の屋敷で餞別の宴が開かれた。その時、大伴胡麻呂らに贈った歌。

韓国に行き足はして帰り来むに大夫建男御酒たてまつる　（4262）

（唐に赴いて十分任務を果たして帰ってくるだろう立派な男子に酒を捧げる。）

大伴胡麻呂には、次の逸話が残っている。天平勝宝 5 年（753 年）正月、遣唐使の一行が、玄宗皇帝が臨御する朝貢諸国の使節による朝賀に出席したとき、日本の席次が新羅より下であったので、「新羅は長く日本に朝貢しているのに席順が義に適していない」と抗議して、日本と新羅の席を交換させて日本の面目を保っている。帰国にあたって、彼が僧鑑真を同行させようとしたことは「鑑真和上東征伝」絵巻にも登場することから分かる。ちなみに、遣唐大使の藤原清河は唐土で死んでしまい、再び孝謙天皇に拝謁することはなった。

ここに、孝謙天皇は、陸奥国から金が産出したときに即位している。この女帝の在世には、大仏の開眼供養（752 年）、聖武天皇の崩御（756 年）、橘奈良麻呂の変（756 年）、光明皇后の崩御（758 年）、藤原仲麻呂の乱（764 年）などが起こっている [19]。藤原仲麻呂の乱が終結した後、彼女は称徳天

皇（第 48 代、在位 764～770 年）として重祚しており、称徳朝では、宇佐八幡宮神託事件（769 年）が起こった。

5.7　大伴旅人の酒を讃むるの歌十三首

酒をこよなく愛した大伴旅人（？～731）は、元明・元正・聖武の 3 代天皇に仕え、60 歳を過ぎた 728 年、左遷され大宰府帥として妻大伴郎女を伴って 2 度目となる九州下向をした。左遷された上、赴任後まもなく妻を亡くしていることから、憂さ晴らしなのか、酒への逃避なのか、達観なのか、十三首の酒の歌を詠んでいる。在任中には筑前守であった山上憶良らと交流しており両者は歌仲間であった。長屋王の変の翌年に帰京している。

験なき物を思はず一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし　　(338)

（考えても仕方ない物思いをしないで　一杯のどぶろくを飲むのがよいらしい。）など

酒の名を聖と負せし古の大き聖の言のよろしき　　(339)

（酒の名を聖と名付けた、昔の大聖人の言葉は素晴らしい。）この歌は、次の逸話にもとづいている。

中国三国時代の魏の政治家徐邈は、曹操が布いた禁酒令を犯して酒を飲んで酔っぱらっていた。儒教を重んじる国では酒のせいで礼節を欠くことやトラブルを起こさないように禁酒令が出されることがあったのだ。そのとき、趙達という役人が職務について尋ねると徐邈は、「聖人の毒に中ってね」と訳の分からないことをいった。それを聞いた曹操は、「聖人とは余のことであろう」と怒って彼を処刑しようとしたところ、鮮于輔という将軍が、「酒の名をはばかって清酒を聖人、濁り酒を賢人と呼んで区別しただけでしょう」といって弁護したので免職で収まった。5.5 項で述べたように酒の隠語が聖人であった。徐邈はいわゆる聖人ではないが酔った人を聖人と称したのである。

古の七の賢しき人どもも欲りせしものは酒にあるらし　　(340)

（昔の七人の賢人たちも欲しいと思ったものは酒であるらしい。）

この歌も、3 世紀の中国三国時代の魏の国で七人の聖人が竹林で酒を飲んだり、清談を行って交流したという竹林の七賢の逸話による。七賢人とは、阮籍・嵇康・山濤・劉伶・阮咸・向秀・王戎の七人で阮籍がリーダー格である。魏から晋の時代には、老荘思想に基づき俗世から超越した談論を行う清談が流行した。儒教思想全盛の漢代から魏の時代になり、知識人たちは常識的な儒教道徳を超えて、主に老荘思想を題材とする幽玄な哲学的議論を交わしていた。その俗世から超越した政治的に危険な言動は、悪意と偽善に

満ちた社会に対する憤りと、その意図の目くらましであり、当時の知識人の精一杯で命がけの批判表明と賞される。

賢しみと物いふよりは酒飲みて醉泣きするしまさりたるらし　(341)

（利口ぶって何かと物を言うよりは　酒を飲んで酔っぱらって泣く方が勝っているらしい。）知ったかぶりをして話すより泣き上手の方がよいのである。

言はむすべせむすべ知らず極まりて貴きものは酒にしあるらし（342）

（言いようも　しようもないほど　きわめて貴いものは酒であるらしい。）良さを表現する方法もないほど貴い極上のものは酒だよと讃酒している。

なかなかに人とあらずは酒壺に成りにてしかも酒に染みなむ　(343)

（中途半端に人間であるより　酒壺になりたかったものを　そうなって酒にしみて居よう。）酒壺になりたいものだ。そうしたら酒と一緒にいられるのにと酒と一体になりたいと詠っている。

この歌も中国後漢末から三国時代にかけて活躍した博学・奇志の官僚で弁舌に優れ、酒好きだった呉の鄭泉の故事に依拠している。鄭泉は、呉の初代皇帝孫権の使者として蜀に行ったとき白帝城にいた劉備に豪胆さを見せ、堂々と和平交渉をした。故事は、彼が、「大きな船に酒を満たし、その中に漬かりながら暮らしたい」と語り、また、死に臨んで子に、「私が死んだら陶器職人の傍に埋めてくれ。そして土に還った後にその土で酒壺を作ってほしい」と遺言したという。数百年の後、土と化した自分が焼き物の材にされ、酒瓶になれたら願いが叶う、というのである。

あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る　(344)

（なんと醜いことよ　利口ぶって酒を飲まない人をよく見ると猿に似ているかなあ。）酒を飲んで己の顔が真っ赤になっていることを自嘲している歌であるとの別解もある。

価無き宝いふとも一坏の濁れる酒にあに益さめやも　(345)

（値段のつけられない程の宝といったって　たった一杯の酒よりどうして勝っていよう。）この歌は、法華経の「衣裏繋珠の譬」にもとづいている[20]。価無き宝（無価の宝珠）とは仏の教えで法華経のこと。法華経の教えより一杯の酒の方が有り難いと嘯いている。

夜光る玉と云ふとも酒飲みて情をやるにあに若かめやも　(346)

（人々が珍重するという夜光る玉だって　酒を飲み憂さを晴らすことにどうして及ぼうか。）

世のなかの遊びの道にすすしくは醉泣するにあるべくあるらし（347）

（世間でもてはやす風流の道になまじ励むよりは酒泣きすることがよいらしい。）風流の道は当時の官人としての教養であった。

この世にし楽しくあらば来む生には虫に鳥にもわれはなりなむ（348）

（生きている今を楽しく過ごせたなら　来世には虫にだって鳥にだって私はなろう。）今生・来世をめぐる輪廻転生の仏教観が見られる。荘子の斉物論にある「来世に蝶になる故事[21]」に拠っている。

生ける者つひにも死ぬるものにあればこの世なる間は楽しくをあらな
（349）

（生きている者は結局は死ぬことわりなのだから　この世にいる間は楽しくこそ生きていたい。）生者必滅の仏教思想を歌っている。

黙然をりて賢しらするは酒飲みて酒泣するになほ若かずけり　（350）

（余分なことは言わずに利口ぶった振る舞いをするのは　酒を飲んで酔っぱらっては泣き言をいうのに　やっぱり及ばないのだな。）

5.8　貧窮問答歌

大伴旅人は酒を讃むるの歌を詠っているが山上憶良は上等の酒を飲めないので酒粕を湯に溶いたものを啜っている。山上憶良の貧窮問答歌の「問」は自分の貧窮を述べ、「答」は地方民衆の貧窮を語った長歌である。

風雑り　雨降る夜の　雨雑り　雪降る夜は　術もなく　寒くしあれば　堅塩を　取りつづろひ　糟湯酒　うち啜ろひて　咳かひ　鼻びしびしに　しかとあらぬ　髭かき撫でて　我を措きて　人は在らじと　誇ろへど　寒くしあれば麻衾　引き被り　布肩衣　有りのことごと　服襲へども　寒き夜すらを　我よりも　貧しき人の　父母は　飢ゑ寒からむ　妻子どもは　乞ふ乞ふ泣くらむ　この時は　如何にしつつか　汝が世は渡る・・・　（892）

（風交じりに雨の降る夜　雨交じりに雪の降る夜は　どうしようもなく寒いので　堅塩を少しづつつまみながら　糟湯酒を啜り啜りして　咳をし鼻をぐずぐずと鳴らし　堂々とあるわけでもない髭をかき撫で　それでも自分以外に立派な人物はいまいと威張ってはみるもののやはり寒いので　麻の夜具をかぶり　布肩衣のありったけを重ねて着るのだが寒い　こんな夜だけを考えてみても　自分より貧しい人の父母は　腹もすかして寒いことだろう　妻や子どもたちは　食べ物をせがんでないているだろう　こんな時はどのようにして　お前は世をわたっているのか・・・）堅塩は精製していない粗製の黒い塩で、「びしびしに」は擬態語である。大伴家持の貴族趣味の歌とは対照的に貧窮を主題に糟湯酒を飲みながら切ない世相を詠っている。この長歌の短歌はよく知られている。

世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば（893）

6.　おわりに

列島で酒の醸造が始まったのは稲作が拡大し、定着してからである。列島では紀元前 1000 年以上前から稲作が行われていたことが推定されており、最古の水稲耕作遺跡は弥生時代早期初頭と推定される菜畠遺跡である。そして、卑弥呼の時代（3 世紀前後）、すでに、人々は酒好きだったという。時代が下って、5 世紀前後と比定される仲哀天皇（第 14 代、在位 9 年）や応神天皇（第 15 代、在位 41 年）の頃は口噛み酒が神に仕える巫女によって造られていたが、この頃に百済から渡来した須須許理がコウジカビを用いた酒造法を伝えたようで、播磨風土記にコウジカビを用いた酒造の記述がみられる。5 世紀前半に存在したとされる仁徳天皇（16 代、在位 87 年））はすでに

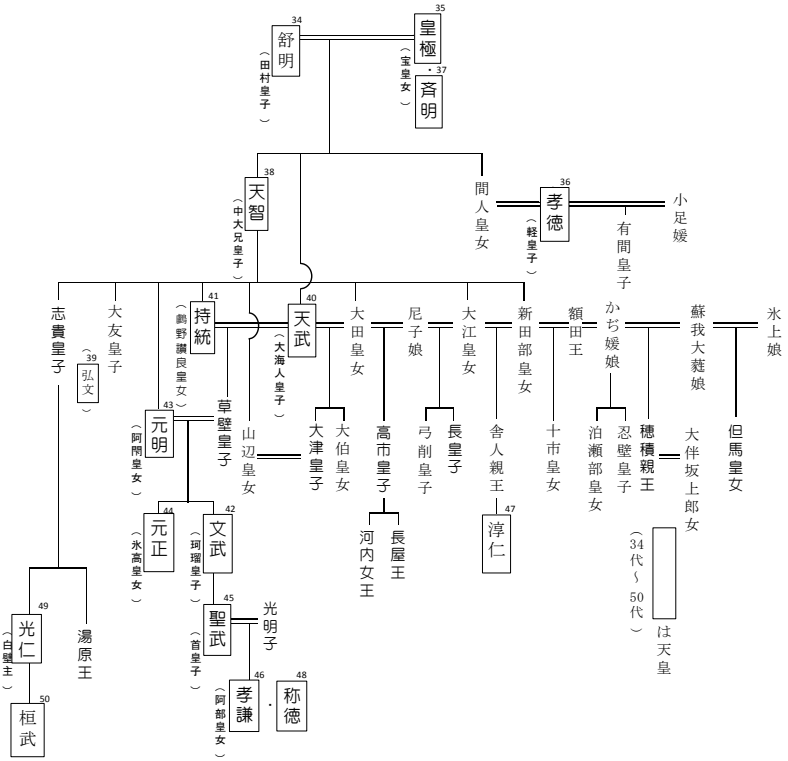

図 3　奈良時代の皇統図。太字は本報に登場する天皇・皇子・皇女。

オンザロックを飲んでいた。酒は、古代から神にかかわる宗教儀式と結びつき、祭祀のとき御神酒として神に捧げられた。この儀式は今に継承されている。そして酒誉めの歌が生まれる。持統天皇の頃には官制の酒造所が設けられた。すなわち、飛鳥浄御原令に基づき造酒司（さけのつかさ）に酒部（さかべ）が設けられ、万葉歌3879 番の酒造りの歌が生まれたのである。酒は、挽歌や待酒と呼ぶ相聞歌に詠われ、風流を好む大宮人に欠かせないのが酒であった。大伴旅人は酒をこよなく愛し、賛美して多くの歌を詠った。そして、山上憶良は貧窮のうちに糟湯酒を啜った。本報中に登場する飛鳥・奈良時代の天皇や皇族の皇統図を図 3 に示す。

7.　文献と注記

1）　発酵は「微生物によって原料となる有機物質から別の有機物への変換することである」と定義される。腐敗も発酵と全く同じプロセスで起こるので同じ文言で定義される。それでは発酵と腐敗の違いはどこにあるのかといえばヒトの役に立つ有機物への変換が発酵であって、害になる場合を腐敗とする。しかし、ヒトにとって食するときに害となる腐敗も地球全体の物質循環にとっては重要なプロセスではある。発酵に関わる微生物には酵母（菌）（イースト）、コウジカビ（糸状菌）、乳酸菌などがある。コメ、ムギ、ブドウなどを酵母菌で発酵させると日本酒・焼酎・ビール・ウイスキー・ワインなどの酒となり、さらに発酵が進むと穀物酢やワインビネガーなどの酢となる。これらのプロセスはアルコール発酵や酢酸発酵という。豆を発酵させると味噌・醤油・納豆ができ、牛乳を発酵させるとヨーグルトやチーズできる。これらは、アミノ酸発酵や乳酸発酵と呼ばれる。

2）　酵母（菌）（イースト）は自然環境でも果汁や樹液の溜まるところに多産する。従って、熟した果物にはアルコールが産生する。ワインは容器に蓄えたブドウの糖分が野生の酵母によってエチルアルコールに変換してできていたのである。酵母は円形あるいは楕円形の５～10 ミクロンくらいの大きさの単細胞で菌類のサッカロマイセス属に属し、出芽または分裂によって増える。この属の多くの種が様々な炭水化物を発酵させる能力を持つので食品製造で非常に重要である。発酵が酵母の生理作用であり、無酸素条件下での呼吸である。酵母がブドウなどの果実の糖分や穀物由来の糖分を取り込み、エチルアルコールに分解して外に出すことで、原料が酒になる。この反応は生物化学反応なので糖分から変換されて生成する物質は有機酸・ポリフェノールなど数百種類の有機成分が含まれ、食品の味や風味に本質的な効果を及ぼしている。日本酒の醸造

プロセスにおいてもエチルアルコールのほか乳酸やコハク酸などの有機酸が多量に産生するので、コクや風味に特徴が出る。ちなみに、酵母の語源は、明治時代にビール製法が輸入されたときに、yeast の訳として発酵の源を意味する字が当てられたのである。

3) アルコール発酵は、酵母がグルコースなどの糖からエネルギーを得るとき、まず、グルコースを分解してエネルギーを得ると同時にピルビン酸となる。次いでピルビン酸を嫌気的条件で各種酵素が働きアセトアルデヒドを経て最終的にエチルアルコールとなる（図 2）。

4) モルト(麦芽)は大麦の種子を発芽させたものである。大麦の種子中には、不活性の糖化酵素アミラーゼ(この場合はジアスターゼという)が多量に含まれている。大麦の種子が発芽するとき、胚乳に含まれるデンプンを消化して自己が生長するためのエネルギーを得るために、胚乳組織内に分泌されるデンプンの糖化酵素やタンパク質の分解酵素を出す。それを酒造に用いるのである。モルト中のデンプンが糖化されて麦芽糖となる。モルトは大麦の種子を水に浸し、発芽して麦芽になった段階で水から出して乾燥・焙煎してつくる。乾燥で成長が止まり麦芽の状態を保つ。大麦を発芽させることでデンプンの糖化という有用な化学反応が容易に得られるのでビールやウイスキーなどの主原料であるとともに酒や酢の醸造に不可欠のものである。

5) コウジカビ（糸状菌）は麹菌（きくきん）ともいわれアスペルギルス属に分類されるごく普通の不完全菌の一群である。コウジカビは種類が多く、特定のコウジカビは自身が増殖するためにコメ・ムギ・マメなどの穀物の高分子量のデンプンやタンパク質あるいは油脂などを分解するアミラーゼ、プロテアーゼ及びリパーゼなどの酵素を体外に分泌する。その結果、それぞれの酵素の作用によってデンプン→ブドウ糖、タンパク質→アミノ酸、脂肪→脂肪酸に効率よく低分子量化するのである。 そして、その恩恵を受けて、日本酒・焼酎・泡盛・味噌・食酢・漬物・醤油などの発酵食品が製造される。

6) 小泉武夫、「酒の話」、講談社現代新書、講談社（1986)。

7) 杉山一男、「万葉時代のグリーンケミストリーへの序」、近畿大学工学部紀要、45 号、109 頁（2015)。

8) 中西　進、「万葉集　全訳注原文付」、1～3 巻、四季社（2008）。

9) イネやムギなどのイネ科植物は根から吸い上げた水分中のケイ酸を細胞壁に蓄積し、細胞内でケイ酸体（プラントオパール）と呼ぶ塊（かたまり）となる。イネ科植物が枯れると有機物は分解されるがケイ酸体はガラス質であるため腐敗しないで土中に残留する。

10）橘　昌信、「九州における縄文農耕の現状―自然科学分野からのアプローチ」、史学論叢（別府大学史学研究会）、18 巻、21 頁（1988）。

11）ヒマラヤ地域と東南アジアを含めた東アジア圏特有の発酵技術として麹（こうじ）がある。麹は、米・麦・豆などの穀物にコウジカビを繁殖させたものであり、コウジカビが体外に分泌する酵素が発酵プロセスで有機物の化学変化に作用する。麹の用い方は２つあり、散麹（ばらこうじ）または餅麹（もちこうじ）として用いる。散麹は麦などを粗く挽き割った穀粒を蒸した後、表面にコウジカビ(アスペルギルス属)を繁殖させたものである。一方、餅麹は生または蒸した穀類を粉砕して水で練って餅状に練り固め、これにコウジカビ（くもの巣カビリゾープス属）を生やしたものである。中国や韓国など日本以外の東アジアの酒は餅麹（もちこうじ）を利用して作られているものが多い。中国では殷の時代（紀元前 16～11 世紀）には餅麹と散麹がすでに酒造に使われていた。わが国においては酒造用にも散麹を使用する。「こうじ」は「かもす（醸す）」の名詞形「かもし」の転訛したものといわれる。

12）グリコシド結合は、例えば、ブドウ糖同士が酸の存在下で反応させると脱水縮合して１分子の水が取れて麦芽糖（マルトース）となる。このときにできる**―O―結合**である（図 4）。

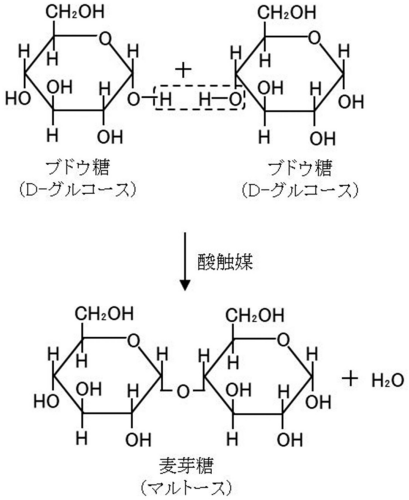

図 4　グリコシド結合の生成

13）オリゴ糖についての明確な定義はないがグルコースやフルクトースのような単糖がグリコシド結合によって結合した分子量が 300～3000 程度の多糖である。マルトースやショ糖（スクロース）（図 5）。

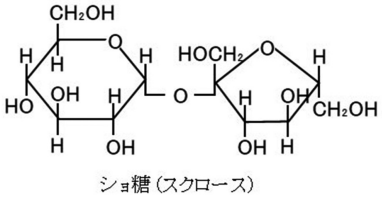

図 5　ショ糖（スクロース）

14）植垣節也、校注・訳：新編　　日本古典文学全集「風土記」、小学館（2012）。
15）山口佳紀・神野志隆光校注・訳：新編日本古典文学全集「古事記」、小学館（2009）。
16）小島憲之、直木孝二郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守校注・訳：「日本書紀」1～3、小学館（2012）。
17）廣野卓、「卑弥呼は何を食べていたか」、新潮新書、新潮社、2012。
18）古代、寺院でも僧坊酒なるものが造られていた。大和や河内の大寺院は治外法権であり、荘園から納入される米や貴族などからの寄進で財力が豊富であった上に、遣隋使や遣唐使になった留学僧などがもたらした最新の醸造技術を手に入れていたので高級な酒を造ることができたのである。
19）杉山一男、「詩歌にみる万葉時代の悲劇の皇子たち」、近畿大学工学部紀要、46 号、95 頁（2016）。
20）『法華経』五百弟子受記品から、

世尊、譬えば人あり、 親友の家に至りて酒に酔うて臥せり。 是の時に親友、 官事の当に行くべきあって、 無価の宝珠を以て、其の衣の裏に繋け、 之を与えて去りぬ。 その人酔い臥して都て覚知せず。 起き已って遊行し他国に到りぬ。 衣食の為の故に勤力求索すること 甚だ大に艱難なり。 若し少し得る所あれば 便ち以て足りぬと為す 後に親友会い遇うて之を見て、 是の言を作さく、咄なる哉丈夫、 何ぞ衣食の為に 乃ち是の如くなるに至る。 我昔汝をして安楽なることを得、 五欲に自ら 恣 ならしめんと欲して、 某 の年日月に於て無価の宝珠を以て 汝が衣の裏に繋けぬ。今故お現にあり。 而るを汝知らずして、勤苦憂悩して以て自活を求むること、 甚だこれ痴なり。 汝今此の宝を以て所須に貿易すべし。常に意の如く乏短なる所なかるべし。

親友は自宅に来て酔っぱらってしまった人の衣の裏に評価できない程高価な宝珠を繋げてやりました。そして親友は仕事のために出かけてしまいました。酔っぱらっていた人は酔いが醒めても宝珠には気づかず、その後も貧しい暮らしをしていました。親友と再会したとき、貧しい人に、「宝珠を資本として、一日も早く正業に就き、専念努力して正しい生活をするように」と諭しました。貧しい人は、自分の心得違いに気が付き、迷いの心から覚めることができたという話。貧しい人とはまだ真実の覚智を得ていない境界を示す。無価の宝珠は妙法蓮華経のこと。酒は私利私欲を生ずる煩悩を指し、酔いは無明の惑いをいう。醒めるは自分の仏性の心に目覚めること。

21）荘子の斉物論第二

昔者、荘周、夢に胡蝶と為れり。栩栩然として胡蝶なり。自ら喩しみて志に適へるかな。周たるを知らざるなり。俄然として覚むれば、則ち蘧蘧然として周なり。知らず周の夢に胡蝶と為れるか、胡蝶の夢に周と為れるか。周と胡蝶と、則ち必ず分有らん。此を之物化と謂ふ。

かつて、荘周は蝶となった夢を見た。ひらひらと飛ぶ蝶である。快く楽しんで、満足していた。（しかし、自分では）荘周であることを知らない。ふと目が覚めると、驚くことに（自分は）荘周ではないか。（これは）荘周が蝶となった夢を見たのだろうか、（それとも）蝶が荘周となった夢を見たのだろうか。荘周と胡蝶とは、きっと区別があるはずである。これこそを「万物の変化」というのである。

要約

古代の口噛み酒はヒトの唾液に含まれる酵素アミラーゼによってデンプンをグルコースに糖化し、次いで野生の酵母の働きによって醸造された。また、渡来したコウジカビを用いる醸造法は、コウジカビが分泌するアミラーゼと酵母の作用で酒を造る。本論文では、これら古代の酒造法について述べるとともに酒にまつわるいくつかの逸話を取り上げる。また、万葉集に採録された酒の歌を抽出し、万葉時代の人々にとっての酒の役割と酒が齎した現在にも通じる古代日本の文化を垣間見る。